

表紙 の 説明

弘前城(白亜の現存天守とサクラ)について



表紙上段の2カットの写真は、ライトアップされた白亜の現存天守と夜ザクラです。表紙下段は、「弘前城」本丸に架かる下乗橋から地上型レーザスキャナで計測した3次元データより作成した鳥瞰図です。狭間(さま)だけで窓がなく、小ぶりの石を積み上げ、意識して大きく見せている天守の構造が分かります。

■表紙画像のご提供先

「漆黒の闇に浮かぶ白亜の天守と夜ザクラ」

河野 隆 氏

地上型レーザ画像——リーグルジャパン(株)

〒164-0013 東京都中野区弥生町5-11-29 フジビル2F

http://www.riegl-japan.co.jp Tel: 03-3382-7340

使用機器: RIEGL社製 VZ-400(ステップ角度0.04°)

太宰治は『津軽』のなかで、「隠沼のほとりに万葉の花が咲いて、そうして白壁の天守閣が無言で立っているとしたら、その城は必ず天下の名城にちがいない。」と弘前城を称賛しています。

弘前城は、西は岩木川、東は土淵川、西から南にかけて急崖が迫る細長い河岸段丘上の台地に築かれた平山城です。本丸を取り巻くように、二の丸、三の丸、西の郭、北の郭があり、三重の水堀で仕切られた輪郭式縄張となっています。

現存する天守(図-1～図-2)をはじめ、五つの城門(南内門、東門、追手門、東内門、北門)と、三つの櫓(辰巳櫓、未申櫓、丑寅櫓)がサクラやマツ・スギなどの林の中に古色蒼然と佇んでいます。

戦国時代、津軽の地は南部氏の支配下にありましたが、津軽(大浦)為信が大浦城、堀越城を拠点に、戦国大名として台頭し、三戸南部氏との激しい抗争を経て、津軽統一を成し遂げました。さらに、為信は、豊臣秀吉の小田原攻めにいち早く参陣して信頼を得ています。また、関ヶ原の役には東軍の徳川方に属したため、本領が安堵されました。

弘前城は、為信が高岡の地に築城を計画し、二代信枚(のぶひら)が慶長16(1611)年にほぼ完成させました。当初は高(鷹)岡城と呼ばれていましたが、寛永4(1627)年の落雷によって五層天守が焼失し、その翌年には弘前城と改称されま

した。現在の三層の天守は九代寧親(やすちか)が文化8(1811)年に竣工させたものです。

弘前城の最大の特徴は、白亜の現存天守(図-1～図-2)と2600本余りのソメイヨシノを中心に、枝垂れザクラ、八重ザクラなど50余种による百花繚乱の景観にあります(図-3～図-4)。

現存の白亜の天守は、本丸辰巳櫓を層塔式天守(層重が上がるに従って低減する天守)の外容に改築したもので、御三階と呼ばれています。この天守は、堀に面した外側(図-1)と本丸に面した内側(図-2)の意匠が全く異なる珍しい形式をしています。これは外側からの景観を意識して大きく見せかける工夫で、図-1のように外側は狭間(さま)だけで全く窓がなく、小ぶりの石を沢山使用することでより威容が増すようにしています。その一方で、図-2のように内側は、採光に配慮した窓のみの単調な構造になっています。屋根は本格的な銅板本瓦葺に仕上げられています。

陸奥津軽の遅い春を告げる弘前城のサクラは4月下旬から見ごろとなり、全国的にも有名です。とくに、漆黒の闇に浮かぶ白亜の天守とこれらのサクラが織りなす情景は幻想的です(図-3)。水堀に映る枝垂れザクラは滝の如く咲き落ち、漆黒を薄紅に染める豪奢な



図-1 下乗橋から見た現存天守 (著者撮影)



図-2 本丸側から見た現存天守 (著者撮影)



図-3 漆黒の闇に浮かぶ白亜の現存天守と夜ザクラ(河野氏提供)



図-4 水堀に映る枝垂れザクラの夜景(河野氏提供)

情景を醸し出しています(図-4)。(瀬戸島 政博)